

p28、p69の一般演題「肝(2) No22」の抄録につきまして間違った内容が掲載されておりますので、下記の通り訂正しお詫び申し上げます。

22 職業性胆管癌との鑑別を要した原発性硬化性胆管炎 (PSC) および潰瘍性大腸炎 (UC) 合併若年性胆管癌の1例

¹香川県立中央病院 肝臓内科、²香川県立中央病院 腫瘍内科、³香川県立中央病院 検査部
筒井 朱美¹、岡本 邦男²、妹尾 知典¹、永野 拓也¹、馬場 伸介³、高口 浩一¹

【症例】35歳男性。【主訴】肝機能障害、便潜血反応陽性。【既往歴】てんかん【職業歴】印刷所勤務【現病歴】2017年2月に検診で肝機能障害(γ GTP368、ALP805、ALT33、AST25)と便潜血反応陽性を指摘され精査目的で当院に紹介となった。下部消化管内視鏡検査で、全大腸に粘膜の浮腫状変化、血管透見の低下、浅いびらんの散在を認め、病理組織学的検査で潰瘍性大腸炎(UC)に矛盾しない所見であった。腹部CT検査で遅延濃染を呈する多発性肝腫瘤を認め、胆管癌もしくは腺癌の肝転移が疑われた。MRCPおよびERCPにて中部胆管に狭窄がみられ、これより上流の胆管拡張を認めたが数珠状変化や短い胆管狭窄など原発性硬化性胆管炎(PSC)に特徴的な所見はみられなかった。肝腫瘍生検にて中分化の腺癌であり、PET-CTで肝内病変以外に原発巣となりうる病変は指摘されなかったため胆管癌と診断し、現在化学療法中である。【考察】職業性胆管癌は2012年に大阪の印刷所従業員に胆管癌が多発している事例が報告され、2013年に「ジクロロメタンや1,2-ジクロロプロパンにさらされる業務による胆管癌」が業務上疾病に分類されるようになった。その後、他地域の印刷所での症例も報告されている。本例は印刷所に勤務していたため職業性胆管癌の可能性について病理組織学的に検討した。背景肝の小型胆管周囲に輪状の線維化を認め、その線維化は緻密なものと同疎な浮腫状のものが混在していた。職業性胆管癌でも胆管周囲に輪状の線維化をみることがあるが、多くの場合緻密な線維化であり、浮腫を伴った輪状線維化は少ない。また、職業性胆管癌では小葉間胆管上皮にBillin類似の増殖性変化をみることがあるが、本例では認めなかった。免疫染色上の特徴として、職業性胆管癌では癌細胞にS100PおよびPD-L1の陽性所見を高頻度に認めるが、本例の癌細胞はいずれも陰性であった。以上より、小葉間胆管周囲に特徴的な輪状線維化がみられ、潰瘍性大腸炎の合併もあるためPSCを背景とした発癌の可能性が示唆された。